■これでいいの？

「毒入り餃子」事件が解決しないうちに、もっと危険な「汚染米の食用への転用」そして、「メラニン混入牛乳」事件があいついで世間を騒がせている。汚染米には「毒入り餃子」事件で有名になった農薬「メタミドホス」の残留した中国からの輸入米や、カビの発生によって生まれる毒性の強いアフラトキシン B1 が混入しているベトナムからの輸入米が問題になっている。この事件が物語っていることは、汚染米を食用に転売した食品流通業者の悪徳非道さ、農水省の監視体制の不備、流通業者と農水省の癒着などがマスコミを通じて取り沙汰されている。しかし、問題の根っこはもっと深く、この問題を引き起こしたのは一部の業者とそれを見逃してきた役所かもしれないが、その温床は現在の私たちの社会そのものにあると考えざるをえない。

私たちの日常生活は世界中から輸入されたモノによって支えられているのが当たり前になってしまっている。カロリーベースで見た日本の食料自給率は 39 パーセント（平成 18 年度）であり、野菜や肉をはじめありとあらゆる食品が輸入され、店頭に並び、日常的に消費している。日本では使用が禁止されている農薬であっても、生産国によってはそれが使用された農産物が日本に入ってきている。発ガン性の高い物質であるアフラトキシン B1 を生成するカビは日本では発生しないが、熱帯、亜熱帯の高温多湿な地域でみられる。日常の食品を海外に依存することを前提に、有害なものを完全に排除するための管理体制を築こうとすれば莫大な資金と多数の専門家そしてそれを支える巨大な組織が必要となる。

■安全な社会は足元から

「汚染米」事件は一部業者と農水省の失政の責任にするのはたやすいが、そこで問題を閉じてしまえば、新たな類似の事件はまだまだ続くように思える。複雑で巨大な既成の仕組みをつくるよりも、私たちの周りに単純で信頼できる地産地消の仕組みをつくることのほうがもっと根本的な解決につながる。地元で生産された食料を口にするライフスタイルを築くことがもっとも安全で信頼でき、また社会的にシンプルで費用のかからない食料システムを築くことにつながる。安全な食料を地域に供給する農業をつくりあげることは、豊かな生態系を地域に築くことにつながり、豊かな環境を享受することのできる地域を将来に残すことにもつながってくる。

食と地域環境が切り離されてしまったことによる危険を目の当たりにして、あらためてそのつながりの大事さを教えられた。食育、産直販売、市民農園、食品残渣のコンポスト化、環境こだわり農業などを通じて湖東平野から食と地域環境の結びつきを回復する動きをもっと起こしましょう。

環境フォーラム湖東代表
滋賀県立大学
環境共生システム研究センター長
仁連　孝昭

環境フォーラム湖東からのお知らせ

環境にやさしい
お買い物には エコバスケット が便利です。

このような メリットがあります！
●お買物袋への詰め替えが不要、そのままお持ち帰りいただけて、お買物がスピーディになります。
●レジ袋が不要で、ゴミの削減につながります。　●HOPカードへエコポイント（5ポイント）を進呈。
●ご不要になった場合は、エコバスケットと引き換えでお預かりしていた315円(税込)をご返金いたします。

受付または
銘店コーナーにて
1カゴ315円(税込)で販売中

※但し、店舗により販売場所が異なる場合がございます。詳しくは係員にお尋ね下さい。

HEIWADO ALPLAZA